

2010年9月13日

初年次教育学会 第3回大会  
に参加して

教育開発支援機構

FD推進センター長 川上 忠重

初年次教育学会 第3回大会が2010年9月11日（土）、12日（日）に高千穂大学で開催された。本大会は高等教育機関で初年次教育に携わっている多くの教職員による、企画セッション（ワークショップ/ラウンドテーブル）、シンポジウムおよび自由研究発表から構成されている。初日は、企画セッションⅠから始まり、各教室に分かれて例えば、総合的な初年次教育プログラムを編成する、どのように初年次教育の組織的導入をはかるか、「身体知」の導入—言語と非言語のワークショップ—、共同学習の考え方と進め方を題目としたワークショップと大学教育における初等教育内容の適要請—初等教育の教科書を通じて—、学生・職員との協働によるFD・キャリア教育—「知恵の共有」を目指して—等が企画され活発なワーク、ディスカッションが行われた。参加した「学生の学びの質を変容させる授業テクニック」のラウンドテーブルでは、大学教育の課題である、学生をより深い学びに向かわせ、卒業後も社会人として継続的に成長し続ける人材になることをいかにして可能にするかに焦点を絞り、大学教員・職員のみならず、企業における社員教育経験者を交えた、「教育実践に必要な授業者側の視点」についての事例紹介の後、実際の担当者が行っている、主体的な学び、わかるということが分からない学生への対応、授業から講義につなぐ「気づき」等の新しい指導技術、授業テクニックについて検討が行われた。全ての初年次教育に適応できるものではないが、「自ら課題を発見し、試行錯誤を

適切に繰り返す力」の養成のためのヒントが数多く確認され有意義なものであった。

午後からのシンポジウムは、「初年次教育のリアリティから教育の質保証を考える」のタイトルで、宮崎学園短期大学の教育力向上に向けての組織的取り組み（宮崎学園短期大学 宗和 太郎氏）、高千穂大学・初年次教育の現状（高千穂大学 成田 博氏）、千葉大学における質保証の取り組みについて（千葉大学 前田 早苗氏）、初年次教育はどこへ行くのか（読売新聞社東京本社教育取材班 「大学の實力」調査 松本 美奈氏）の話題提供の後、国立教育政策研究所 統括研究官 川島 啓二氏を交えた話題提供者全員によるパネル・ディスカッションが行われた。特に、現在の高校生は、「なぜ大学に進むかよくわからない」、よくわからないけれども、「親や教師に勧められて」、あるいは「友達が行くから」、「将来、ちゃんとした就職ができそうだから」といった理由で大学進学をしている実態や、「大学全入時代」を歓迎しながらの「学びの質向上」に向けた仕掛けについても議論が行われた。

初年次教育は、すでに各高等教育機関で数多くの取り組みが行われているが、そのスタイルが多様化しつつあり、そのため評価の良し悪しやアウトカムのみが議論される場合もある。あらためて本学の初年次教育の在り方を今回の大会から考察し、各関係センターとも協力しながら提案をしたいと考えている。

以上